

八代教授

野原 望 教授

昭和51年(1976)―昭和63年(1988)



野原望教授はその間に多くの要職を歴任され、教育、診療と研究に多大な功績を残された。野原教授の個性を一概に表現することは難しいが、自己を律する強靱な意志があり、公的な場では背筋が通っており、発言は人の道にかなった道理に基づいたものであった。多くの医局員には厳しい先生という評価が強かったが、これは現今のほめておだててやる気を起こさせるという風潮とは異なり、教室員を皮膚科医として、社会人として教育しようという気持ちの表れであったと思う。一方では人情味の深い先生であったことを知る人も多い。

野原教授の元で植木宏明（川崎医大）、吉田彦太郎（長崎大学）、荒田次郎（高知医大）、高岩堯（香川医大）、小玉肇（高知医大）と多くの教授が輩出された。

学会関係では日本皮膚科学会理事、日本研究皮膚科学会理事長として指導的役割を果たされたほか、関連学会の評議員を歴任された。前任の谷奥喜平教授を中心に結成された皮膚科研究同好会を、種々の思惑の中で路線の統一を計り、日本研究皮膚科学会として発展させ、米国および欧州研究皮膚科学会と対等の合同学会を開催する素地を作られた功績は特質に値する。昭和60年、フランス皮膚科梅毒学会国外通信会員に推されている。また昭和49年に日本皮膚科学会西日本連合地方会会長、昭和54年に**皮膚科研究同好会**会頭、昭和57年にプレジデントとして**International Workshop of Investigative Dermatology** (Kyoto)、昭和60年には**日本皮膚科学会総会**会頭と学会を主催された。

研究面では実験梅毒に始まり、皮膚における生化学的研究を先駆的に取り上げ、着実な成果をあげられたほか、皮膚科領域における感染症、免疫学にも多大な業績をあげられた。黄色腫にみる皮膚の脂質代謝では世界的であった。日本における皮膚形成外科のパイオニアの一人でもある。

大学行政では岡山大学評議員、医学部附属病院中央検査部長、医学部付属病院長、医療技術短期大学部設置準備室長ほか種々の委員として大学行政に手腕を示された。特に附属病院長在任中に外来棟の新営が完成した。

小玉肇. 岡山大学医学部皮膚科学教室 野原望教授時代. 岡山大学医学部皮膚科学教室同門会誌. Dermatopia 開講50周年記念号 p 22-25, 2010. より抜粋

昭和62年3月岡大広報65号より抜粋